

禁じ手授業



玉子王子 著

一章 舐められるから悪って？

体格的には、女子のほうが勝っていた。

そういう年代なのだ。

しかし、押しているのは男子。

高橋小学校という、うさぎ県のどこにでもある小学校。その四年教室。

掃除をさぼろうとした男子に女子が文句を言い、口では勝てない男子が相手を突き飛ばしたのだ。

関係ない男女まで険悪になる。

男女二〇人ずつ程度。

男子全員が狂暴でもないが、中心的な男子五人ほどが怒鳴り、手を振り回して女子たちを威嚇する。

またか、とため息をつくのは担任の女教師萩瀬。

突き飛ばされ、倒れた女子が涙ぐむ。誰も助けない。助ければ次は自分だ。

いや、一人前になる。

一際小柄な少女。立稲瑠璃子。

「なんだよ瑠璃子、お前そいつと仲悪いジャンかよ！」

突き飛ばされた少女は、確かに瑠璃子と仲が悪い。

「関係ないでしょ、そんなこと！ それより暴力はやめなよ！」

「ぼうりよくはやめなよー」



せせら笑う男子たち。といっても、加藤という男子のカーストトップを中心五人に、一〇人かそこらではある。

そんなに一枚岩でもない。が、一様男子は男子側だ。

歯を食いしばる瑠璃子。

男子より女子のほうが大きいといってもそれは平均値の話で、個人的には小さい者は小さい。

瑠璃子など、一年に紛れ込めるほど小さい。

それでは狂暴な男子と争うのは難しい。

教室に入る萩瀬。

「何してるの。掃除しなさい」

教師が入ってきた。

それで、女子たちは助かったという顔はあまりしない。

正直、男子になめられている萩瀬。

それでも、所詮小学生なので一様大人相手に多少は遠慮もある。

あった。

だが、長く舐めた態度をとり、特に仕返しもされない経験を繰り返したため、ついに加藤が口を滑らせる。

「掃除なんて男がやることじゃねー。女子がやりゃいいんだよ」

「な、何言ってるの」

ふら、と気が遠くなる萩瀬。

「だってそうでしょ先生。先生だって家事だけやってくれる男と結婚する？ 男は所詮働かなきゃならないんだから、家事ぐらい女がやれよ。家事やる男なんて評価しねえくせに、やらないとだめってなんだよ」

「いいから掃除しなさい！」

「やだよ、女の言う事なんて聞くかよ！」

「な、なんてことを……」

震える。

——なんてことなの、ひどいわ。今時何考えてるのこの子。確かに私だって家事だけする男なんて絶対結婚相手に選ばないから、ええ顔する意味ねえ、って言われるのはわかるわ。でも……とにかく、間違ってる！ っていうか、そもそも「女の言う事なんて聞くかよ」ってのはもろ差別だし！

あまりにも無茶なことを言われたので、一瞬何も言い返せなかった。

その間に、さっさと走って出ていく加藤たち。

男子全員が出るでもないが、半分ぐらいは出て行ってしまう。

加藤らを追う萩瀬だが、ばらけて逃げられるととても捕まえきれない。

女子と逃げなかった男子にだけやらせるわけにもいかず、その日の掃除は中止にする萩瀬。

家で荒れる。

萩瀬は四〇ほどで、一人娘が中学生の家庭。

小さなマンションの一室に住む。

夕食後、娘は自分の部屋に。

居間でくつろぐ夫の前で、ついに怒りを爆発させる。

「畜生がっ！ 女のいう事なんて聞かない？」

「あははは、そんなこと言われたんだ。舐められてるな」

同じく教師である夫。

ビク、と萩瀬の頬が引きつる——といっても夫も萩瀬だが。

見もしない夫。

「びしっと言ってやらないから舐められんだよ」

「へー、それじゃあなた、びしっと言ったことあんの？」

「いや、舐められないからないけど」

「へー！ いいっすねー、男性様は、舐められないで。女は舐められて大変なのよ」

頬を引きつらせる夫。

——おいおいなんだその発言は。女は弱いから舐められて当然と俺も思うけど、ここで「おうそうだな」じゃポリコレ的に許されねえ。ほんのりクソリベラル寄り教師として利口な立ち位置だ、ここは否定して、ええ顔するしかねえ。

「いや、女だからみんなってこともないだろ。やっぱお前に隙があるんだよ」

あまり「ええ顔」になっていないセリフを吐く夫。

一瞬何か言い返そうとするが、急に感情のない顔を見せる萩瀬。

「そう……まあ、そのとおりね」

ため息をつき、受け入れる。

振りをする萩瀬。

——隙見せるから悪い？ へー、そういう**歴史認識**なんだー。ほんじゃ、自分が隙を見せたら、何かされても構わないってことっすよねー？

ストレス解消に久しぶりにセックスしようと誘い、一緒に風呂に入る。

頭を洗う夫。

風呂椅子に座り、目を瞑ってわしゃわしゃ。妻しかいない風呂場、無防備に開かれた逞しい太ももの間にはお世辞にも逞しくないものの、やるときはやる機能十分な男のシンボル、そして命が二粒。

娘を作るのに協力し、新婚のころは毎夜自分を喜ばせてくれたシンボルよりも、その下の命のほうに目を向け、頬を緩ませる妻。

その背後に忍び寄り、胸を密着して抱き着く。

「ねえー」

「あ、お前、待てないの？」

まんざらでもなさそうな夫。両手を前に回し、妻が太ももを撫でる。

「うふふ、隙だらけね、あなた」

「え？ あ、ちょっ」

キュ。

太ももの間にするりと滑り込ませた細い女の手が、夫の最大急所を握る。



体調次第で剥けたり剥けてなかったりする小ぶりな一物の下、肉の玉を握り込む。

「ちょ、なんでそっち……」

「さっきいったよねー、隙を見せるから悪いって」

——さー、どう言い訳する？ あれはそういう事じゃない。いや、悪かった。あのぐらい根に持つなよ。なんていうかな？

キュキュキュ、勝手知ったる夫の肉玉を柔らかい妻の手が握る。

この世界はナノテクが発達し、睾丸ぐらいなら薬一粒で一瞬で治る。

そのため、玉を持たない女性らは割と軽い理由で**ガチ金潰し**を仕掛けてくる。

前に夫が浮気したとき、萩瀬は今握っているモノを思いきり蹴り上げ、**片金潰し**していた。もし治らない世界なら、フライパンで張り倒すぐらいにしておいただろう。

しかし、治るのだから、浮気への怒りはそこに示すのが一番と判断した。

泡を吹く夫を見下ろし、自分は絶対そうならないことへの優越感に胸を膨らませ、浮気への怒りがかなり収まったのを覚えている。

——うふふ、言い訳が下手だと。今度はダブルゴールド死亡確認よ？

「ちょっとまで由美子」

女教師は、萩瀬由美子。

「なに？ おキ〇タマだけは許してって？」

「いや、隙がどうとかって、何の話だ？」

「あー、そういう誤魔化し？」

「っていうか、マジでわからないんだけど」

「だから、さっき私が生徒に舐められてるって」

「え、生徒に舐められてるのか？」

「んー？」

「バシッといわないからだぞ」

「ちょ……さっきと同じこと言ってない？」

言いつつ、頬を引きつらせる萩瀬。

「だから、さっきってなんだよ。何の話だよ」

「あー、つまりあなた……私の話適当に聞き流して、適当に返事してただけなんだー。さっきのがピンポイントにどうかという話じゃなくて、大体ずっとそんなノリだったのね？ 聞いてなんだかんだ言っても、すぐ忘れるのね。これからもその調子なのね？」

キュ、と夫の玉が必要以上に縮む。

——おいおい何が起きてるんだ？ でも、なんとなくわかる。一つ気にくわないことがあったら、過去にまで遡っているんな出来事の意味を書き換えて**思い出し歴史捏造ムカつき**をかます、女特有のあの感じ……

「いやいやいや、とりあえずそれ放そう。それは俺のというより、もはや君のモノなんだし」

「私のモノならどうしようと勝手だよねー。こうやって力入れてー」

「ちょおおお」

「護身術の練習に、男の急所を握り潰す！」

ぎゅううううう、女の力に必死で抗う男の命。

バタバタと手足をばたつかせるが、急所を握り潰しに来られた状態でまともに抵抗などできない。
妻に背後から抱き着かれて睾丸を握り潰され、目を剥き、唾を飛ばす夫。

「あおおおおお！ たまはあああああ！」

「うひひひ、奥さんがおキ○タマ狙てきたら、かわせる旦那さんはいないのよー。そらそらー、潰れる潰れるおキ○タマー、潰れ」

ブチュ、と娘の元を作り出した物体が手の中で潰れるのを感じる萩瀬。

「ふぎいいいいいいいい！」

ブシュ、と唾を噴き出し、白目を剥く夫。暗雲が晴れたようにぱつと顔を明るくする萩瀬。

「あは……キ○タマ二個とも潰れちゃった。二個とも、潰れた！ キ○タマ潰れた！ あなたのキ○タマ、私の手の中で潰れちゃった！ 妻にコーガン握り潰された夫！ みじめー！ タマタマ妻に潰されて、今日からあなたは金無し夫！ エッチ相手に去勢され、無駄チンついた去勢豚！」

泡を吹き白目を剥く夫の耳元でささやく。じつりと雌穴が湿っていた。

ぐいぐいと、女の部分を夫の尻に押し付ける。

葉で早く肉玉を再生させ、ベットに引き込みたかった。

玉潰しで濡れる。

そんな自分に気づかないふりをする萩瀬。

グニグニと、空になったというよりゼリー状の残骸が入っている肉袋を揉む。

「うふふ、金無し金無し、キ○タマ無し。チン○ンも小さいし、おキ○タマまで無くすなんてもう男じゃない……私の夫、男じゃないわ。うう、なんか、興奮する。うふふ、金無し夫。って、もう夫じゃないわね。おキ○タマを潰された元夫・去勢豚。ほらほら、豚くん、小さいチ○ポも取っちゃおうか？」

指のハサミでチョコキチョコキと一物を挟む。挟みつつ、気づく。

目を輝かす。

「やだああ！ おチン○ン、立っちゃってる！ うは、キンキン潰される危機に、チン○ンが立っちゃったんだ。そしてタマタマが潰れた後も立ちっぱなし……意味ねえ！ 玉無し勃起野郎意味ねえ！」

マットに押し倒し。立ち上がる。ブルンと巨乳が揺れる。秘かな自慢である。腹もプルッと揺れるが、そちらは気づかないふり。

股を広げ、夫の股間にまたがる。

「うふふ、小さいから入れにくいのよねえ。言えないけど。いや、ガチで言えない。主婦仲間とガールズトークで話すだけ」

小指のような一物。

それでも、萩瀬はそれを一番受け入れてきたし、愛してもいる。

肉玉を潰しておいてアレだが、治るからこそその行動だ。

もし治らないなら、夫のそれは自分の命と引き換えにしても守ってやりたいと思う。

そこまで大事なのに、「治るでー」といわれた瞬間「大した理由もなく潰していいモノ」になるのはなぜだろうか。

やはり「自分についていないから痛みもわからないし、同じ仕返しもされない」という理由だろうか。

娘がまだ起きているので、タオルを噛んで悶える萩瀬。

そのため、近くに来た娘が風呂で物音がするのに気づき、電気もつけっぱなしなので入ってしまう。

母親の“楽しそうな声”が風呂場から聞こえてきたら、静かに離れただろうが、物音程度なのでつい何しているのか気になってしまった。

「ひっ、何してるの！ え、ウツソ！」

母親が風呂場にいるのはわかっていた、服があったので。父親の服もあったが、それはもう風呂に入り、自室にいるのだと思っていた。

両親がそろって風呂にいるとわかっていたら、やはり静かに離れたことだろう。

予想外の状況に顔を真っ赤にする娘。

母親も、驚きのあまり嘔き出す。

「ぶっ、こ、これは……」

「って、お父さん泡吹いてない!？」

「あ、これは大丈夫。タマタマ潰しただけだから」

「え、タマタマって……男の人の?! なんで？」

「ん……勢い？」

「勢いで人の父親女にしないでよ! もうっ」

怒っているが、笑っている。娘も玉が簡単に治ることはわかっている。

ならば、玉潰しなど女にとって半ば以上お笑いでしかない。

母親も笑いをこらえる。

「ごめんごめん。でもお父さんの名誉のために言っとくけど、柔道やってるからお父さん結構強いだよ。でも男の人だからねえ……」

「ここ、弱いよね男って。クラスのバカ男子も」

「軽く蹴ったら「はぐう」だもんね」

「お母さんもやっぱりやったんだ？」

「タマタマなんて簡単に治るんだから、金的なんて女の権利にして、嗜みよー」

「だよねー。治らない時代とは違うよね」

全裸で、騎乗位していた母親と和気あいあい話す娘。母親の腰の下に、玉を潰された父親がいるのにかかわらず、金的談義で盛り上がる。

これが娘ではなく息子だったなら、ありえない展開だった。同じ無敵の股間を持つ女性同士でしか起こりえない展開。

「ってというか、聞いてよ。生徒の男の子たちがねえ。クソガキ盛りで」

「いやいや、私の年でも男子はクソ以外の何物でもないよ。そんなのでも顔がいいやつとは付き合うバカがいてさー。私にもちょっかい出してくるからタ○キン蹴り上げてやったら、泡吹いたんで見てやったら、二個とも潰れてたよ。治したらわかったけど、玉小さいから簡単にいっちゃって。あ、チ○ポもこんなだった」

いって、娘が示すのは父親のそれよりかなり立派なものだった。

それを「小さくて笑えるもの」として示され、母親は目が泳ぐ。

「あー、そう？」

「そうそう! こんな小さいチ○ポぶら下げて顔がいいからってよく女と付き合えるよねー。女子になったほうがよくね? って、さすがに言えなかったわ」

言いつつ、やっとな風呂を出ていく娘。

ため息をつく母親。

「やっぱ、これ小さいよねえ」

娘と話して、セックス再開もきついで立ち上がる。まだビンビンの夫のモノを見下ろす。

——見れば見るほど小さいわ。体ががっちりして背も高いから余計に目だって……いや、愛してんのよ？

と、がらりと戸が開く。

「言い忘れたけど。あ！」

母親が立っていたので、思わず父親のほうを見てしまう娘。

顔を赤らめ、ついで、鼻で笑う。

「うは、これが私を作った……は一、知りたくなかったー」

「いやいやいや、エッチは上手なのよ？」

「それってカス男と付き合ってる女が「魅力がありまあす」って必死こいて言い訳してる感じに聞こえるんだけど、ノーベル賞取る学者に対して「この人は頭がいいんです」とかわざわざいう？ 魅力ねーから「魅力がある」っていうんでしょうが……まあ、これ以上このネタはやめたほうがいいね」

背を向ける。

その前に、いう。

「そうだ、男子生徒に困らされてんだよね？ お母さん」

「そうなのよ。クソ生意気で、女だからって私の事舐めてんのよ」

「キ〇タマ蹴ってやったら？ 女の怖さと男の弱さ、同時に思い知らせる一番の手が玉金蹴りっしょ」

「いやいや、年齢一桁もいる四年生よ？ いくら女性蔑視発言されても、金の玉蹴り潰したら大変でしょ」

「いや潰れるほど蹴るのはさすがに……っていうか、そうよねえ。生徒同士の喧嘩ならまだしも、お母さんがやっちゃまずいか」

今度こそ風呂を出ていく娘。

残される全裸の母親。

キラキラと、目が輝いていた。

——そうよ、あんなクソ野郎どもは金の玉を蹴るしかないわ。蹴って叩いて握り潰して、男に生まれたこと後悔させてやるのよ。前からやりたかった。でも、私がやったら問題だからって我慢してたけど……あは、喧嘩よ、生徒同士の喧嘩なら問題ないのよ。あの子、いいこと教えてくれたわ。

にんまりと笑う。

その足元で、辜丸を潰された夫がまだ一物をガチガチにしていた。

体験版終わり

この後、萩瀬は男子生徒らへの恨みを晴らすため、禁断の授業へ……

男子らは金責めの嵐に見舞われ、さらに他の学年、男性教師らまで巻き込まれて行きます。

続きは製品版でお楽しみください